法然仏教学研究センター　2017 年度全体研究会

〈第 1 回〉

日　時：2017 年 4 月 17 日（月）

参加者：18 名

・センター長挨拶

・各班進捗状況発表

〈第 2 回〉

日　時：2017 年 5 月 19 日（金）

参加者：23 名

・研究発表

発表者：明石和成（元知恩院浄土宗学研究所研究員）

テーマ：法然上人における善導教学の受容とその展開」の足跡を訪ねて
―藤堂恭俊台下との暖かい思い出を今に―

要　旨：今、大学院でお世話になっている息子が、「お父さん、先生が大学で話をして下さいと言っていましたよ。」と話してきました。「何先生？」「本庄先生と伊藤先生」「どんな話をしたらいいのかな？」息子とのやり取りのなか、５月９日夜本庄先生から携帯電話に連絡がありました。

宗研時代に藤堂台下を中心に、高橋台下福原台下藤本先生藤堂俊英先生永井先生などのスタッフメンバーに入れていただき、研究所で本読みをすることになりました。最初はまだ学部生でした。代表者藤堂恭俊の名前で、『佛教文化研究』第２３号、２６号、２８号にその成果を発表していますが、その時の話をして欲しいとの意向でした。

何分４０年ほど前の話で、今看護学校などで講師をしている身ですが、しばらく思い出すのに時間がかかりました。

研究対象と方法についての話になろうかと思います。石井教道編『昭和新修法然上人全集』を読んで、法然上人の遺文から五部九巻と称せられる善導大師の言葉を、抜き出す作業です。偏依善導と自身が傾倒していった法然の思想の流れを考える基礎資料となる作業でありました。

言うまでもなく、善導の言葉を把握しなければ進めません。「善導曰く」、「善導の御心」、「禮讃に曰く」などは分かりやすいが、遺文中いきなり

善導の言葉を引用している箇所もあるので要注意でした。
藤堂台下には、のちの大学院博士課程も含め、温かいご指導を得た喜びが今日まで宗教者としての礎になっています。台下のご晋山後に戴いた手紙と写真を添付させていただきます。まさにその温かさを十分に感じ取ることができます。またこのような機会を与えて下さった本庄、伊藤先生に感謝申し上げます。

・各班進捗状況発表

〈第 3 回〉
日　時：2017 年 6 月 19 日（月）
参加者：16 名
・研究発表
発表者：上野忠昭（当センター嘱託研究員・浄願寺副住職）
テーマ：傍依の論としての『大乗起信論』について
要　旨：『選擇集』第一章「道綽禪師立聖道淨土二門而捨聖道正歸淨土之文」は、浄土宗の教相を示す一段であるが、そこに「傍らに往生浄土の教えを明かす経論」の一つとして『大乗起信論』が挙げられている。すなわち『起信論』の末尾に、臆病な心を起こして修行をやめようと思う者に対して、勝方便として専意念仏によって仏国土に往生し不退転の信心を得ることができると説いていることを指す。分量的にはわずかではあるが、専意念仏の説を本論述作の八つの動機の一つに挙げており、往生浄土は『起信論』のテーマの一つとして説かれているのである。善導は『観経疏』で『観無量寿経』像想観を解釈するにあたり、唯識法身の観ととも

に自性清浄仏性の観を斥けている。『大乗起信論』全体の文脈が、善導の指方立相説と相反するものであれば、「傍らに往生浄土の教えを明かす論」として法然は『起信論』をとりあげただろうかという問いのもとで、『起信論』の概要を示し、そこで展開される心真如門と心生滅門の二面とその相互のはたらきかけの理論の中で指方立相がどういう意味を持つのかを発表した。

・各班進捗状況発表

〈第 4 回〉

日　時：2017 年 10 月 16 日（月）

参加者：24 名

・研究発表

発表者：大谷旭充（当センター嘱託研究員）

テーマ：『三部経大意』至誠心釈について

要　旨：現在、『三部経大意』には、金沢文庫蔵建長六年（一二五四）写本、専修寺蔵正嘉二年（一二五八）写本、龍谷大学蔵元亨元年（一三二一）開版『和語燈録』所収『三部経釈』、の三点の古写本・古版本が知られている。特に至誠心釈に関して、金沢文庫本と専修寺本には『和語燈録』所収『三部経釈』にはない文章があり、これまで研究者の興味を引いてきた。

しかし、未だ『三部経大意』至誠心釈の特徴・構造が十分に理解されているとはいえず、全体的に再検討する余地がある。

先行研究では、『黒谷上人語燈録』や『選択集』を中心とした法然遺文に説かれる至誠心釈と『三部経大意』至誠心釈とを比較し、『三部経大意』至誠心釈は「特異である」・「他の法然遺文にはみられない表現がある」といった評価・認識がなされてきた。すなわち、表現を中心とした分類学的考察、その評価に基づく思想分析である。

一方、本論考では、他の資料との比較を控え、『三部経大意』至誠心釈のみから、そこに説かれる構造を明らかにする。

その結果、①『三部経大意』至誠心釈には明確な理論・構造があることを明らかにした。その上で、②他の法然遺文におけるすべての至誠心釈は、『三部経大意』至誠心釈の理論の上に成り立っており、③廬山寺本『選択集』第八章引用段善導至誠心釈 208 文字の欠落は『三部経大意』

至誠心釈に説かれる理論に基づいた省略であるという一考を提示した。本論考は、『三部経大意』至誠心釈のみに注目したものであり、『三部経大意』という文献自体を扱ったものではない。しかし『三部経大意』に説かれる思想が『選択集』に至るまで大きな影響を与えているという一つの事例を示したことにより、先行研究を補う形で『三部経大意』の文献価値・位置づけに影響を与えるものである。

今後の課題として、①『三部経大意』という文献の位置づけ、②法然三心釈の成立が挙げられる。本論考の成果は、『三部経大意』・『逆修説法』・廬山寺本『選択集』・『選択集』を中心に、『黒谷上人語燈明録』を補足的に用いる、法然研究スタイル確立への足掛かりとなる。

・各班進捗状況発表

〈第 5 回〉

日　時：2017 年 11 月 27 日（月）

参加者：18 名

・研究発表

発表者：小川法道（当センター学術研究員）

テーマ：延年転寿の思想史

要　旨：不老長寿を願うのは、世界共通の願いであるのだが、特に顕著なのが中国であろう。そのことはサンスクリットの Amitābha を「無量光」と訳すべき所を「無量寿」と訳していることからも窺えるのである。そのような寿命を延ばすことに関して「延年転寿」という語がある。「延年転寿」は自己の力または仏の加護によって、この世における寿命を延ばすはたらきがある。この「延年転寿」は業思想と関連の深い思想であり、浄土教の中で業がどのように変遷したかを知る手がかりとなり得る。この「延年転寿」という語は善導が使用するのであるが、善導の師匠である道綽は「延年益寿」という。この「転」と「益」の語によってどのような違いがあるのかについて考察する。

中国の道教の代表的な著書『抱朴子』では、寿命の長短を左右する神が存在し、寿命が増える方を益算といい、逆に減る方を奪算というのである。『抱朴子』では「延年益寿」という語を使って、寿命を増やす功能があることを表いていた。その思想が仏教の中にも取り入れられ、『四天王経』等の経典が出て来るのである。しかしインドのアビダルマの中で

も「留捨寿行」と説いて、仏また阿羅漢の位の者ならば、寿命を自由に操ることができると説くのである。また『法華経』では、菩薩が衆生に『法華経』を広めるために寿命を延ばすことが説かれていて、菩薩精神を表していた。よって寿命を延ばすことのできる功能は中国的なものが多いと考えられるけれども、一概に中国的なものと決めつけるのではなく、インド仏教の中にも求められることを考慮しなければならないのである。

また「益」と「転」の違いについては、道綽は『抱朴子』や大乗『涅槃経』から「延年益寿」と使うのであり、「延年益寿」が仏教よりも中国的であることを指摘し、また善導は師の道綽の影響を受けつつも『大智度論』の「転寿」の語を使って「延年転寿」と表現し、転換という仏教教理を踏まえた上での使用であると指摘した。

・各班進捗状況発表

〈第 6 回〉

日　時：2017 年 12 月 11 日（月）

参加者：18 名

・研究発表

発表者：服部純啓（当センター学術研究員）

テーマ：『決定往生集』の研究

要　旨：はじめに

珍海は、我が国の浄土教思想発展の流れの中で重要な位置を占め、源信から法然へと続く思想の媒介役とされている。しかしその重要性に反して、珍海の研究は、源信・永観・法然等の諸師と比較して多くない。今回は『決定往生集』等について、先行研究の整理を行い、筆者自身の研究の現状を報告したい。

一、珍海および『決定往生集』研究史

近代における先行業績を整理すると（一）画僧としての珍海、（二）『決定往生集』の思想、（三）『決定往生集』の書誌、（四）三論教義と珍海との関係を中心に研究が進められてきた。『決定往生集』の思想研究のテーマに限定すると（一）菩提心・念仏観、（二）浄土観、（三）信心観が挙げられる。この中、菩提心・念仏観を扱う研究には次のような共通点が見いだせる。（一）扱う資料がほぼ第五修因決定に限られる。（二）珍

海は源信・永観から法然に至る浄土教の流れの中での媒介者であるとする。（三）称名念仏を往生の正業とするのは菩提心が正因だからであるとする。

以上のように、第五「修因決定」以外の箇所は、あまり扱われていないのが現状である。

二、書誌研究

『決定往生集』の諸本に関しては、坂上雅翁氏によって次のような写本、版本、活字本が紹介されている。

【写本】①宝寿院本（高野山宝寿院所蔵）一一四二年書写、②禅林寺本（禅林寺永観堂所蔵、書写年不明、③藤堂本（藤堂祐範氏所蔵）一二五〇年書写。【版本】①寛文五年（一六六五）版（龍谷大学所蔵）、②宝永七年（一七一〇）版（京都大学所蔵、寛文五年版と同じ版木で刷られた）、③元禄九年（一六九二）版（奈良県立図書情報館所蔵）。【活字本】①『大正新脩大蔵經』第八四巻、②『浄土宗全書』第一五巻（底本寛文五年版）。

このうち藤堂本、禅林寺本に関しては坂上氏により、影印、翻刻等がなされているが、珍海存命中の書写に係る宝寿院本等、これまで公開されていない文献もあり、研究の余地が残されている。

三、研究の現状報告

筆者は現在、坂上氏が高く評価している元禄九年版を底本と定め、書き下し、現代語訳、典拠調査を実施している。今後は、第一依報決定から順に内容を吟味し、『決定往生集』全体の思想の解明を目指す。

・各班進捗状況発表

〈第 7 回〉

日　時：2018 年 1 月 22 日（月）

参加者：17 名

・各班進捗状況発表

以上